

オストメイトのトイレ利用実態と整備のあり方に関する研究

福祉社会デザイン研究科 人間環境デザイン専攻 博士後期課程
4740150001 熊澤 宏夫

第一章 序論

1-1 研究の背景

オストメイトとは、腹部に排泄のための開口部（ストーマ）を造設した人のことであり、ストーマの種類によって、コロストミー、イレオストミー、ウロストミー、Wストーマに分類される。オストメイトが外出先で排泄するためには、お腹から直接排泄できる設備が必要である。オストメイト人口は増加を続け、建築設計標準（平成28年度改正版）では、多機能便房にあったオストメイト用設備を機能分散することが進められている。オストメイトのトイレ使用実態は、環境整備検討が必要であるが、詳しいデータは見つからない。

1-2 既往研究

既往研究では、多機能便房を機能分散するにあたり、一般便房にも最低限の配慮が必要であることが提唱¹⁾され(2005年)、その後の研究²⁾(2014年)で、多機能便房そのものも数かたりないことも指摘された。医学系の研究でも、実際のトイレ使用に関する研究はない。

1-3 研究の目的

オストメイト配慮のトイレ環境整備検討に際し、本稿では次の6項目の視点から、整備方策の提案に結びつけることとした。①既存のトイレの設置経緯と現在の整備状況を確認する、②トイレ利用に関する属性間の違いを確認する、③配慮したトイレを優先的に検討すべき施設（建物用途）を明らかにする、④日常使用する便房、必要とする便房を把握し、便房ニーズを明らかにする、⑤便房内行為の実態と便房整備課題を明らかにする、⑥設備の使用課題と必要な設備機能を整理する

1-4 研究の方法

上記の課題を把握するため、以下の調査を組み合わせて課題の研究を行った。

研究方法1：日本オストミー協会役員との面談(2016年5月, 12月, 2019年6月)

研究方法2：トイレ現場調査(2008年9月～2019年7月)

研究方法3：郵送によるアンケート調査(2015年9月～10月)

研究方法4：面談ヒヤリング調査(2015年9月～2018年2月)

1-5 論文構成

第一章は、研究背景、既往研究、研究目的、方法を踏まえ、本研究の必要性を明らかにする。第二章は、オストメイト対応トイレ普及経緯と整備状況を、既存のトイレ現場事例から明らかにする。第三章は、トイレ使用頻度・時間、利用施設の調査結果から、トイレ使用の属性間の違い、施設ニーズを分析し、課題をまとめる。第四章は、外出先トイレ使用理由、困り事等から、必要とする便房ニーズを探る。第五章は、便房内行為の実態から、

整備課題をまとめる。第六章は、オストメイト配慮の設備機能について、そのニーズ、困り事等を明らかにし、必要性の高い機能と要件をまとめる。第七章は、配慮対象者、優先整備施設、便房整備の方向性、便房内行為実態、設備改善課題を考察し、結論へと導く。

第二章 オストメイト対応トイレ普及の現状と課題

当事者団体(日本オストミー協会)が行政に陳情したことから始まったオストメイト対応トイレは、便房内に必要な設備機能として、汚物が流せること、ストーマ部位をお湯で洗えること、ストーマ装具を洗えること等が提示され、現在の基準解説にも盛り込まれた。

オストメイトは小物類をトイレ内に持参して処理を行う必要がある。排泄行為に、装具交換や腹部ケアが加われば、使うべき小物類の数は多い。これら小物類を便房内に置くための柵やスペース確保は、オストメイト配慮の必須要件のひとつであると考えられる。

既存のトイレでは、10年以上前の設備も健在であり、現場では古い設備、最新設備が混在し、使い方も異なる。また、ペーパーがなく、温水が出ないなど、必要設備機能が欠けている現場も多々見られた。基本機能の配置や仕様について再検討する必要がある。

第三章 属性と優先整備すべき建物用途

3-1 属性間の違い

アンケート調査(2015年)の回収結果では、ストーマ種別の構成比は、コロストミー(65.1%)、ウロストミー(18.6%)、イレオストミー(12.5%)、Wストーマ(3.8%)でコロストミーが65%を占め、性別では、男性56.6%、女性43.4%で、男性回答者が多かった。また年代では70~80代が最も多いが、ストーマ造設年代では、30~50代が全体の53%を占めた。

属性別の外出先でのトイレ使用頻度、使用時間は図1のとおりであるが、特に年代では、30~50代がトイレ使用頻度、トラブル頻度が多く、トイレでの排泄時間は少ないものの、トラブルや装具交換では最も時間がかかっていた。この傾向はストーマ種別のイレオストミーについても同様であった。

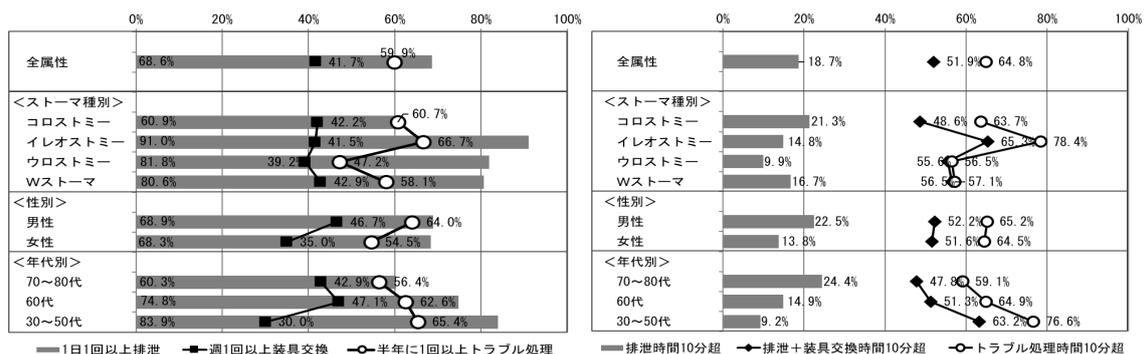


図1 外出先での排泄・装具交換・トラブルの頻度(左)と時間(右)

3-2 優先整備すべき建物用途

アンケート結果で必要施設として高い比率を示した7施設について年代別の内訳を図2にまとめた。60代と70~80代のオストメイトは日常使用施設も必要とする施設も同程度の回答率を示したが、30~50代のオストメイトは、日常施設ではオフィスやコンビニの比率が高く、必要施設としてはスーパーや旅客施設が、他の世代より高いことが確認できた。

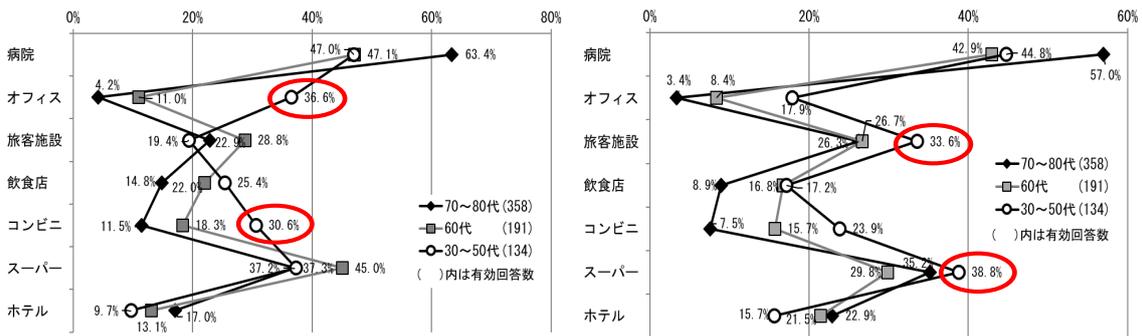


図2 トイレの日常使用施設(左)と必要施設(右)の年代別回答率

第四章 属性別の便房ニーズ

4-1 便房種別の利用者属性別使用比率内訳

図3にオストメイトが日常使用している便房の種別を属性別にまとめた。ストーマ種別では、ウロストミーが一般便房を日常使用する比率(74.4%)が高く、性別では男性が多機能便房を使用する比率(24.4%)が高かった。年代では、60代以上で多機能便房使用比率(24.9%)が高い一方、30~50代の8割近く(76.8%)は一般便房を日常使用していた。

図4にオストメイトマークの認知率、クレームを経験した比率、トイレで気が引けた比率をまとめた。オストメイト全体で9割近くがマークを認知していたが、オストメイト対応トイレを毎日利用している人は少なかった(全体で20%前後)。特に30~50代は多機能便房の日常使用率が10%未満であった。30~50代の方は、一般便房使用率が高い(76.8%)一方で、オストメイトマーク認知率は10割近く(97.4%)、日頃は一般便房を使っている、いざという時のためにオストメイト対応トイレの場所を事前把握していた。

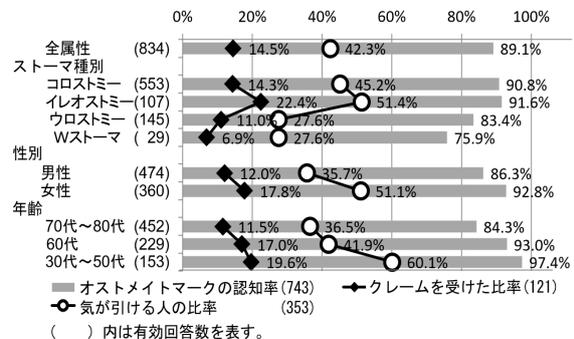
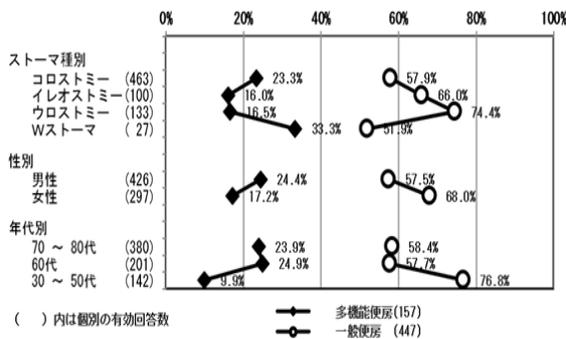


図3 多機能便房、一般便房利用者の属性別内訳 図4 マーク認知度とトイレ利用意識等

第五章 便房内行為の実態と整備課題

オストメイト対応トイレを日常使用するオストメイトがトイレ内で行っている行為の比率を次図5にまとめた(回答者152名)。オストメイト対応トイレ内では、半数未満ではあるが、汚物を捨てる事に加えて装具交換や腹部のケア(腹部を洗う、腹部を拭く)が日常的に行なわれていた。また、オストメイト対応トイレ内での行為について、アンケート調査とヒヤリング調査で得たコメントを表1にまとめた。結果、腹部を洗う等、具体的な行為の方法が明らかになった。

また、オストメイトが便房内に持ち込む小物類について、ヒヤリング面談者12名から、

当日持参された小物類を撮影した結果、全員が概ね 420 mm×297 mm の A 3 サイズのスペースがあれば、小物を置けるということを確認した(図 6)。

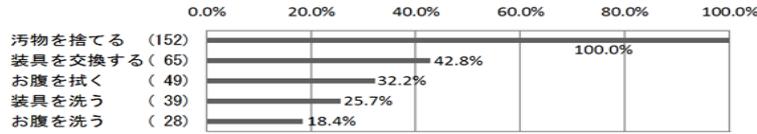


図 5 オストメイト用設備で排泄する人の行為の比率

表 1 オストメイト対応トイレ内の行為に関するコメント

回答番号 性別	ストーマ種別 年代 経験年数	コメント(総数66)
<脱衣 (4.5%)>		
S0040 男性	Wストーマ 60代 8年	(脱衣の工夫) ひもの先にクリップを付けたもので衣服のすそをつる。
<汚物を捨てる (15.2%)>		
S0117 男性	コロストミー 30~50代 1.5年	(排泄の準備) トイレットペーパーを、3回分ほど先に用意する
<装具を交換する (12.1%)>		
S0373 女性	イレオストミー 30~50代 13年	(装具交換と腹部のケア) もれそうな時、もれてしまった時、外出先で交換。装具を交換する場合はいつも腹部ケアする。体調の悪い時、お腹の調子が悪い時30分以上かかることもある。
<腹部を拭く (3.0%)>		
N17 女性	イレオストミー 60代 42年	(清浄剤を使う) 清浄剤を使えば、水なしで簡易的に汚れを拭き取る等、腹部のケアができる。
<腹部を洗う (6.1%)>		
N06 女性	イレオストミー 30~50代 2年	(腹部洗浄方法) オストメイトマークのついてトイレがあれば使っている。汚物流しでお腹を洗うには、美容院で髪を洗うように、蛇口からお湯を出しながら、それを手のひらで受け、お腹にあてるようにすれば、あまりこぼれないで使えた。
<装具を洗う (16.7%)>		
S0975 女性	コロストミー 70~80代 14年	(装具の中を洗う) 便を出してお湯で洗い、装具の中をきれいにしておきます。



図 6 小物類のサイズ

第六章 設備機能の課題と改善の方向性

アンケート調査で、オストメイト用設備を日常使用している人に、設備で困っている事を機能別に確認したところ、右図の回答比率を得た。困り事が一番多いのは「汚物流し」の跳ね返り

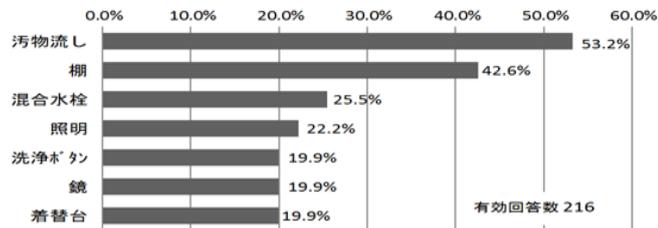


図 7 オストメイト用設備に関する困り事の内訳

りや高さ調整できないことで、次は、位置が高いことや面積が小さいことなどの「棚」の機能、三番目は混合水栓で、操作がわからないこと。他には「鏡」が見えない、「照明」が暗い、「洗浄ボタン」の位置がわからないこと等があがっていた。また、この設問の自由記入欄には「汚物流し」に関連するコメントが 44 件、「棚」について 23 件、「紙巻器」がない、手が届かない、片手で切れない等のコメント 18 件などがあつた(回答者数 111)。

通常汚物流しのボール水面に汚物が落ちると、跳ね返り現象が起こる。跳ね返りを少なくするため、装具を腹部に付けたまま、先端をできるだけボール水面に近づけて排泄すると身体的負担が大きい。多くの人は、水面にペーパーを敷いて跳ね返りを低減する措置をとっている。洗浄方式変更により跳ね返りは軽減したが、汚物流し高さなどの課題が残る。

また、オストメイトは片手でストーマ装具を持ち、もう片方の手でペーパーをカットして装具口を拭く。腹部を洗う時も装具交換も、必ず片方の手は腹部のストーマや装具を持ち、反対の手でシャワーやペーパー、ケア用品を持つ。オストメイト用設備の機能では、片手で操作ができること、手の届く範囲に設備器具が配置されていることが重要である。

第七章 結論

それぞれの課題から明らかになったこととその解決策を以下にまとめた。

7-1 既存のトイレの整備状況

オストメイトは、排泄や腹部のケアに必要な様々な小物類を持参しており、棚が必要であるなど、健常者とは優先度の異なる設備が必要である。オストメイト用設備が登場して10年以上経過し、当事者が求めてきた環境整備は、法的基準として整ってきた。しかし現在、古い仕様の製品から最新のものまで様々な製品が設置され、使い方も異なっており、紙巻器がないなど、現場によっては大事な機能が欠けていることもあった。

必要機能が欠けている場合は補修も必要であるが、オストメイト用設備は、基本的に一定の機能は備えている。多機能便房がいつも混雑する場合は、棚や紙巻器等の補修で処理時間を効率化して混雑緩和することも手段のひとつとなる。

7-2 トイレ利用に関する属性間の違い

オストメイトは多様な世代に及ぶが、30～50代の就労世代のトイレ利用は、他の世代と比べて排泄やトラブル頻度が高く、装具交換やトラブル処理には特に多くの時間がかかっており、外出先では排泄のみで済ませ、装具交換や腹部のケアは自宅で行うことが多い。トイレ利用で困り事の多い世代であり、トイレ環境整備では優先配慮を要する。

就労世代は、外出目的に仕事に占める比率が高いことも明らかになっており、就労世代が利用する施設（次項）と合わせて検討する。

7-3 優先的に検討すべき施設（建物用途）

オストメイトの過半は30～50代の就労世代でストーマを造設しており、術後の外出頻度、トイレ利用頻度も高く、一般便房、オストメイト対応トイレ等の整備の必要性も高い世代である。就労世代がトイレを日常使用あるいは必要としている施設には、身近な就労環境にも対応が必要である。特に就労先であるオフィスや立ち寄ることの多いコンビニ等、30～50代の就労世代がよく利用する建物用途への対応が急務である。

7-4 属性別の便房ニーズ

オストメイトの多機能便房利用率は低いが高知率は高く、トラブル時には利用率が10%あがる。日常の利用率が低い（特にイレオストミー、30～50代）のは外見が健常者とかわらないこととトイレの長時間使用が原因だと考えるが、どちらの理由もオストメイトの自助努力では簡単には解決できない課題である。機能分散が進展し、専用便房が増えれば利用率も上がることが期待できるが一般の健常者とのかちあいもあり得る。

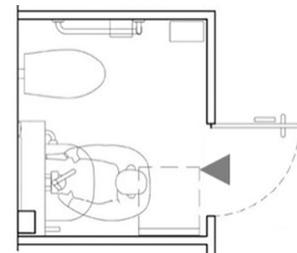


図8 便房プラン例

オストメイトの一般健常者への認知よりも、オストメイト設備そのものが認知され、それを利用しなければならない人がいることを知ってもらうための便房プラン（図8はオストメイト設備の前が扉）、配置が必要だが時間がかかる。まずはオストメイト用設備（次項）の改善で時間短縮し、オストメイトの悩みが緩和されることを期待したい。

7-5 便房内行為の実態と整備課題

オストメイトはオストメイト用設備を使い、排泄だけでなく、持参の小物類を使って装具交換、腹部のケア等を行っていた。腹部を日常的に洗う人が2割程度はいたこと等、一部のオストメイトには設備の利用が定着したが、行為に時間がかかり、臭いが残り、床が濡れることを心配していた。しかし、臭いや床が濡れることは工夫をすれば解決も可能であるが、時間がかかることは自助努力では難しい。オストメイト用設備改善が必要である。

7-6 設備機能の課題と改善の方向性(オストメイト用設備)

オストメイト用設備に今後必要なことは、操作性を向上させ、利用者の身体的負担を軽減すること等の要件を追加することで、オストメイト用設備の改善をはかり、トイレ使用時間を短縮することである。オストメイト用設備には、汚物流しの跳ね返りなど、既に改善された項目もあるが、右手でも左手でも器具に手が届き、片手で操作できること

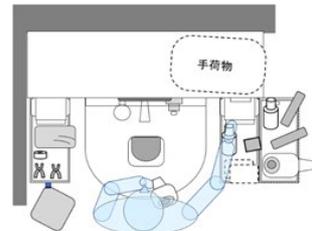


図9 片手でペーパーカット

等(図9)は、オストメイトの身体特性から考えて必要な要件である。また、従来のオストメイト用設備要件では、汚物を流す、装具を洗う、装具交換や腹部のケアをする等の行為ができること等があることが要件となっていたが、使い勝手の良い便房および便房内設備(図10はその参考例)を計画することも必要である。そこで以下の要件を追加したい。

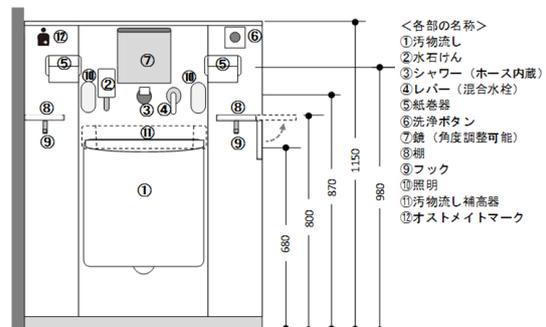


図10 オストメイト用設備機能配置例

- ・オストメイト用設備に追加配慮する要件(普遍的で最低限の条件)
 - ・片手で操作できること
 - ・手が届きやすいこと(設備機能の配置)
 - ・身体的負担が少ないこと
 - ・ストーマ周辺がよく見える配慮があること(照明、鏡)
- 尚、一般便房内での普及や作業の効率化をはかる方策としては、以下を提案する。
- ・高齢者等、他者への配慮との共用化をはかる(例：棚付手すり)
 - ・大便器周辺に必要な設備機能を配置する

最後に、日本のトイレはスペースの制約が大きい。機能分散で一般の男女別便所にオストメイトの機能を有する便房が配置されたとしても「専用」であれば場所の確保も難しいことが推測される。オストメイトが気兼ねなく利用できるトイレ整備が最終目標とすれば、オストメイトの方自身の心の持ち方も重要であるが、一般便房で棚付手すりを共用化するように、オストメイト用設備も一般便所内で他者と共用化する検討が今後の課題として残る。しかし、乳幼児連れの人と併用されれば、人口から考えて(推定 270 万人以上)、トイレで時間のかかるオストメイトには使いづらくなる。高齢者や脳卒中者等との共用化等、さらなる研究が必要である。

参考文献

- 1) 田中直人、老田智美：オストメイトの公共トイレ利用実態及び意識に関する研究、日本建築学会計画系論文集 第595号、pp.17-23、2005.9
- 2) 沼尻恵子、高橋儀平、佐藤克志、小野田吉純、江藤祐子：多機能トイレの利用実態とその改善方策に関する基礎研究、日本福祉のまちづくり学会 福祉のまちづくり研究第16巻 第2号、pp.1-9、2014年7月15日